

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

編集長 昆 吉則

穀物トウモロコシの地域自給を目指す 研究会に参加しませんか

本誌では先に「農村経営研究会」のご案内をし、多数の皆様から参加のお申込みや資料提供のご依頼を受けているが、同研究会は12月16日に経済団体へお呼びかけをしたうえで、今月号には間に合わないもので、追って発足イベントについてのご案内をしたいと考えている。

さらに、この研究会の活動と対をなして我が国の農業・農村改革を進めるものとして、裏表紙のご案内にあるとおり、「穀物トウモロコシの地域自給」を目指す研究会を併せて発足させたい。これは、今月号を含めて何度も指摘したとおり、コメ生産の低コスト化や水田経営を含む我が国の土地利用型農業の経営イノベーションを実現し、同時に現在100%輸入に依存する穀物トウモロコシの国内自給に取り組みするための研究会としたい。

交付金を目当てに飼料稲や稲WCSを生産することは否定しない。その交付金が農業経営の財務上の改善につながると思うからだ。しかし、この政策は長続きしない。政治家や農水省、農協が何と言おうとも実需者である畜産・酪農家こそ

れを望んでいない。飼料価値が低いからだ。世界中で日本だけで行なわれている稲の飼料化。それも最大10万5000円（10a当たり）という法外な交付金が前提になってのものだ。その財政負担が過大であるだけでなく、いかに「水田農業を守るために」などという美しい言葉で修飾されようとも、農業を知らない国民だましの政策である。そして、社会や顧客に必要として選ばれる競争をする経営者にとってそれは望むべき姿だろうか。そんなことでしか事業を成立させられない農業経営者を後に続く若者たちは誇りを持って見つめるものだろうか。

農業に一定の政策的支援があるのは当然だと思う。しかし、水田を含めた穀物トウモロコシの生産は、農業経営者自身の技術革新の取り組みが必要だが、飼料稲を作るよりはるかに小さな財政負担で、我が国の農業全体、ひいては国民全体により大きな価値を提供できる。

とはいえ、これまでまったく行なわれてこなかった穀物としてのトウモロコシ生産を我が国に定着させるためにはさまざまなハードルがある。それでも、読者のチャレンジの

報告でおわかりのとおり、3万5000円の水田飼料作の交付金を前提に、物流コストをかけずに地域自給すれば、輸入トウモロコシと変わらぬ価格での供給も可能である。それも海外の作況や為替変動に影響されぬ飼料供給が可能になるのだ。

それを政策要求するのではなく、全国に100カ所以上ある自家配合をする畜産・酪農家、あるいは地域の飼料商に結びつけて実現していく、現場の取り組みで農業を変えていくのではない。

本誌読者の中には水田経営に畑作作業機を導入し、水稲生産の合理化と低コスト化を実現している人々、あるいはそれにチャレンジする人々がいる。そのような読者にも自ら地域の畜産・酪農家を巻き込んでいただきたい。さらに本誌が仲立ちとなり、読者や関係企業の協力も得ながらトウモロコシの地域自給に関する経営と技術情報を提供し、現地検討会も行なっていきたい。参加いただく経営者にはバイオニアハイブレッツドジャパン社によるトウモロコシ生産に関する技術指導もお願いする。

水田経営を中心とした土地利用型経営者のみならず、需要者としての畜産・酪農家や、このテーマに関する関係企業がこの「経営実験」に参加されることをお待ちする。